

目的語の認知と行為連鎖の二方向性

高橋 勝 忠

1. はじめに

基本的には学校文法では、目的語は他動詞の動作や行為の対象となる名詞のことを言う。「に」は間接目的語を導き、「を」は直接目的語を導くと捉える。例えば、「トムがボールをメアリーに投げた」の文で考えると「トムが」の部分は主語で、「ボールを」は直接目的語で、「メアリーに」は間接目的語の機能を持ち、格助詞の「が」「を」「に」は前に名詞を従えて、それぞれの機能を果たす構造格の資格を持つ¹。私達は「*トムがメアリーをボールに投げた」はすぐにおかしいと感じる。不自然な部分は「?メアリーを投げた」「*ボールに投げた」の箇所があると誰もが気づく²。なぜなら、「を」は「投げる」という動作の対象を表すが、一般的には投げる対象は「物」で、「人」を投げる対象にしないからである。しかし、もっとおかしいのは受け手となる対象が「ボールに」で表されている点である。「メアリー」は「ボール」の受け手となるが、明らかに「ボール」は「メアリー」の受け手にはならない。「?メアリーを投げた」は例えば、喧嘩をしている状況を想定すると、「トムがメアリーをソファに投げた」というのは正しく解釈される。「ソファ」という「物」が場所として解釈され、メアリーの「着点」になる可能性があるからである³。

本稿では、英語の「動詞+目的語」(e. g. Tom climbed the mountain)と「動詞+前置詞+目的語」(e. g. Tom climbed up the mountain)の構文における目的語の解釈の仕方に焦点を合わせる。すなわち、「トムは山に登った」のか「トムは山を登った」のどちらの格標示の解釈がそれぞれの構文の訳として相応しいのか。また、「トムは山を下りた」(Tom climbed down the moun-

tain.) と言うが「*トムは山に下りた」とは言わない。そして、「山の頂上から下りた」(cf. Tom climbed down from the top of the mountain) と言うが、「山の頂上を下りた」(cf. *Tom climbed down the top of the mountain) とは言わない。(cf. ?トムは山から下りた。? Tom climbed down from the mountain)。日英語に同じような関係がなぜ成立するのだろうか。

次の第2節では、Tom climbed the mountain と Tom climbed up the mountain の解釈として「山に登った」と「山に登った」のどちらが妥当であるかを検証するために、英語の「動詞+目的語」と「動詞+前置詞+目的語」構文における移動動詞と目的語名詞の意味的關係を見る。具体的手順として、2.1節では「に」「を」「から」の格助詞の意味を田中・松本(1997)と森田(2006)の分析に従い検討する。次に、2.2節では「に」「を」「から」の格助詞が移動動詞とどのように関係するかについて、「起点」「経路・場所・経由点・方向」「帰着点」の助詞の意味に基づき分析する。また、「山に登る」「山に登る」の「に」「を」と「登る」の意味的關係を捉えるために時間のアスペクトの観点から「登る」の語彙的意味について言及する。

第3節では、谷口(2005)の行為連鎖(action chain)の観点から移動動詞を見ると英語の「動詞+目的語」と「動詞+前置詞+目的語」の構文が日本語の助詞の「に」「を」とどのように関係し、エネルギーの伝達としてはどのような構図になるかを考える。従来のLangacker(1990)のピリヤードボール・モデルとは異なる行為連鎖の二方向性の提案を行う。

第4節では、「に」「を」「から」と移動動詞の關係だけでは説明できない問題点を指摘する。解決法として、Pustejovsky(1995)のクオリア構造を導入した方向性を探る。具体的には、目的語名詞や主語名詞の目的役割(クオリア)を考慮に入れることにより、「に」「を」「から」の格助詞と移動動詞の關係を考察する。

第5節はまとめである。

2. 移動動詞と目的語名詞の意味的關係

2.1 「に」「を」「から」の格助詞の意味

次の例に基づいて、「に」「を」「から」の本質的な違いについて検討してみよう。

- (1) a. {?川 / 木 / 山} にのぼった。
b. {川 / 木 / ?空} をのぼった。
- (2) a. {玄関 / 応接間 / トイレ} に入った。
b. {玄関 / ?応接間 / *トイレ} に入った。
- (3) a. 門 {を / から} 出る。
b. 廊下 {を / ?から} 歩く。
c. 公園 {を / ?から} 散歩する。

田中・松本 (1997: 29-40) によると、「に」の機能は「着点」「場所」「受け手」「目標」「随伴」「割合」「原因」などさまざまであるが、基本的には「Xに」は「Xを対象指定し、動詞的チャンクに差し向けよ」ということである。分かりにくいと言っていることは、例えば(1 a)において「?川に上る」が「木に登る」や「山に登る」よりも違和感をおぼえるのは、「川」が「木」「山」と違って対象指定(固体化)しにくいから動詞と整合しないということである。一方、「Xを」は「Xを動作がする対象として取り立てよ」ということで、(1 b)において「?空を昇る」が不自然なのは「空」が動作の対象になりにくいからであり、「川を上る」「木を昇る」が自然なのは「川」「木」を経路にして移動するという解釈ができるからである⁴。

森田 (2006: 250-253) も「を」が移動動詞と一緒に用いられると「経路」⁵を示し、「玄関に入る」はその奥へ進む(つまり家に上がる)一過程として捉え、「玄関に入る」と言えば、家の外から玄関の中へ位置を移す、「入ること」に目的意識があると見ている。

- (4) a. 玄関に入って右側に応接間があります。
b. どうぞ寒いですから玄関に入ってお待ちください。

(2 b)で「玄関に入った」に対して、「?応接間に入った」「*トイレに入った」が不自然なのは「玄関」は起点や途中経路として家の中に進むことができるが「応接間」や「トイレ」は最終目的地であり、普通の状況ではさらに奥に進む必要がないからであろう。もちろん、「応接間」や「トイレ」を経路と仮定すると「応接間を通過して、庭に出た」は家の造りによっては可能な解釈であるが、「?トイレを通過して、庭に出た」は「トイレ」は一般的には経路解釈がしにくい場所なので不自然に聞こえる。基本的には「入る」は(2 a)の例が示すように、「に」の着点と折り合いがつく。「出る」は起点の「を」と折り合いがつく (e.g. {玄関/応接間/トイレ}を出た)。しかし、「出る」には「着点」(「出てきた」)の意味もあり、「に」に対応する表現ができる (i.e. {?玄関⁶/ *応接間 / *トイレ}に出た)。

森田 (2006: 254-256) は「を」の「起点」を持つ例として「門を出る」「故郷を離れる」「東京を出発する」を挙げている。この場合に、「を」は「から」と言い換えることができるが両者には違いがあることを述べている。「を」は「移動行為の始まる地点がほかの場所ではない、ここだ」と示し、「から」は「一つの境界線を設定し、その境界線を越えて他方側へと移ること」を示す。「から」は要するに二つの領域間の移動なので(3 b, c)の「?廊下から歩く」「?公園から散歩する」のような同一領域の場所の移動には用いられない。

「を」と「から」の区別については田中・松本 (1997: 30-31) も議論している。「Xから」はXを「地点」として、「Xを」はXを「対象」として捉える違いがあると考える。「バスの中から外へ出た」は良いが、「?バスの中を外へ出た」は不自然である。なぜなら、「バスの中」は「起点」として明示されるが、「バスの中」は「出る」という動作の対象にはなりにくいからである。「?階段から降りる」がやや不自然なのも階段が「地点」として解釈しにくいからであり、母親が子供に向かって「階段から降りなさい」と言えるのは「階段」が前景化されて「階段」が「地点」となるからであろう。「階段の一番上から飛び降りなさい」は「地点」をさらに明確にしている。ただし、

飛び降りるのは「階段」を経路とする行為ではないので「を」格を使った「*階段の一番上を飛び降りなさい」は不自然になる (cf. 「階段を下りなさい」)。

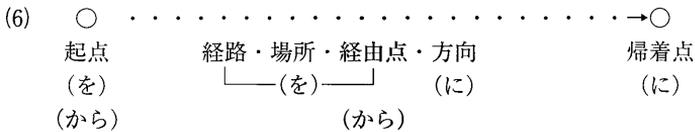
英語も from を使用する場合としない場合の違いは日本語と同じである。Tom climbed down from the top of the mountain と言うが、*Tom climbed down the top of the mountain と言わないのは、山の頂上が「地点」となり from と一緒に使用されるのに対し、「山の頂上」が「下りる」動作の「対象」や「経路」になりにくいからである (cf. Tom climbed down the mountain.)。

さて、細かいところでは説明の仕方が違うが、先行研究で言っていることを森田 (2006: 250-251, 255) に従い整理すると、「に」「を」「から」の機能は「移動動詞」との組み合わせで、概略以下のようにまとめられるであろう。

- (5) 「に」の機能：動作・作用の方向・帰着点 (「前に進む」「駅に着く」)。
経路を表さない (「川に沿う」)。
- 「を」の機能：移動行為の起点 (「席を離れる」「電車を降りる」)。
移動の経由点 (「門に入る」)。
移動の経路・場所 (「道を歩く」「公園を散歩する」)。
- 「から」の機能：移動の起点 (「バスから降りる」「屋根から落ちる」)。
移動の経由点 (「門から出る」「窓から部屋に入る」)。

2.2 「に」「を」「から」と移動動詞の関係

(5)で言っていることを時間の流れで図式すると次のようになるであろう。



「に」は基本的に着点を表すには、「移動動詞」の中でも「着く」「届く」「戻る」のような着点を含意する有方向動詞に限られ、「向かう」「近づく」「迫る」のような動詞それ自体で着点を含意しない有方向動詞や、「走る」「歩く」「飛ぶ」のような移動様態動詞は着点よりも途中のプロセスを示している。

- (7) a. トムは駅に着いた。
 b. 本が研究室に届いた。
 c. トムは自宅に戻った。
- (8) a. トムは駅に向かった。
 b. 電車が駅に近づいた。
 c. ストーカーが女性に迫った。
- (9) a. トムは駅に走った。
 b. トムは駅に歩いた。
 c. セスナ機は成田に飛んだ。

(9)の動詞はそれ自体で方向を示さない。「に」が方向を表し、「～の方に」の意味である。動詞に「～て行った」を付けると「走って行った」⁷「歩いて行った」「飛んで行った」となり着点を示すことができるが、その一方で(8)のそれぞれの動詞に「～て行った」を付けても着点を表さない (e. g. 「*トムは駅に向かって行ったので電車に間に合った」cf. 「トムは駅に走って行ったので電車に間に合った」)。

まとめると、(7)の移動動詞はそれ自体で着点を表し、(6)における「帰着点」を示す格助詞の「に」と折り合いがつく。このタイプの動詞は Vendler (1967) で言うところの到達動詞 (achievement verb) に属する。(8)の移動動詞はプロセスのみを表し、複合動詞にしても着点の結果を表さないことから、(6)における「方向」を示す格助詞の「に」と折り合いがつく。その一方で、(9)の移動動詞は複合動詞にすると着点を表し(6)における「帰着点」の「に」と折り合いがつく。複合動詞にしなければ単なる方向を示し、(6)における「方向」の「に」と折り合いがつくことになる。

ところで「登る」は上記のどのタイプの動詞になるのであろうか。最初に、「に」と「登る」の関係を見てみよう。「トムは山に登った」を考えると、「登る」は上に向かう有方向動詞である⁸。しかし、「1時間で山に登った」とも「1時間、山に登った」とも言える。前者の「に」は「山頂に着いた」の着点を表す。後者の「に」は何を表すのだろうか。(6)の方向の「に」であろうか。「??1時間、山の方に登った」が変なので「方向」の「に」ではない。「に」

は山に登る経路でもない。なぜなら、「? 1時間、山道に登った」(cf. 「1時間、山道を登った」)は不自然なので「に」には「を」の経路的解釈はできない。「道から離れて山に登った」が可能であることから「に」は「経路」ではない。今の段階では「1時間、山に登った」の「に」は(6)における移動の行為の「場所」として捉えておこう。「山に登っている」と「～ている」を付けると「結果状態」と「継続」の2つの意味を持つことから考えると、「登る」は(7)(8)の動詞の両面の語彙的アスペクトを持つと言えよう⁹。

次に、「を」と「登る」の関係を見てみよう。「山に登る」は「山に登る」と同様に、「1時間で、山に登った」とも「1時間、山に登った」とも言える。前者の「1時間で、山に登った」は「山を登り切った」感が「1時間で山に登った」よりも強く感じられる。「1時間で山を征服した」と言えるが、「*1時間で山に征服した」と言えないのは「を」と「に」のこの違いから来るのであろうか。「山に登った」は「山に登った」と同じように「山」は経路ではなく行為の場所としておこう (cf. 「迷いながら1時間、山に登った」)。

英語では、Tom climbed up the mountain とすると後半に、but he gave up climbing it on the way を続けることができるが、Tom climbed the mountain のあとには but 以下の文を続けることができない (i. e. *Tom climbed the mountain, but he gave up climbing it on the way)。一般的に、英語の「動詞+目的語」は達成 (achievement) の全体的解釈を表し、「動詞+前置詞+目的語」は行為 (activity) の部分的解釈の意味が出てくる (Anderson 1971: 392)。とすると、達成感を表現する英語は Tom climbed the mountain なので the mountain の訳としては「トムは山を登った」と「を」格で日本語に標示するのが相応しいということになる。

Dixon (2005: 300) は対象となる目的語が苦勞しないで登れる小高い丘のような場合には up が義務的に使用され、エベレストのような困難な山に登るときには up が省略される傾向があることを指摘する (e. g. We climbed up the little hill in the south-east corner of Regent's Park. cf. They climbed Everest.) Dixon の見方が正しいとするなら Tom climbed up the mountain の “the moun-

空間的な移動がない場合でも、John baked the potato (「ジョンは芋を焼いた」) のように芋 (patient) の「状態変化は位置変化である」と捉え、(10)の構図で説明する。

動能交替が可能な表面接触動詞 (e. g. hit, kick, hammer) の場合は、(11)のような構図となり、位置的・状態的变化は中立であることが点線で示される (e. g. He kicked the door, but it didn't open at all 「彼はドアを蹴ったが、ドアはまったく開かなかった」)。



行為連鎖は、知覚動詞 (e. g. see, hear, feel) のように、対象に影響を与えない場合も次のように捉えられる (e. g. John saw a rainbow 「?ジョンは虹を見た」¹¹)。



谷口 (2005) によると、(11)(12)は(10)のプロトタイプな構図から逸脱し、他動性 (対象に対するエネルギーの伝達度) は低くなると仮定する。(12)は(11)と違って対象の変化がまったく含意されないことから考えると、知覚動詞は表面接触動詞よりも他動性はさらに低くなるであろう。

認知プロセスにおける認知的際立ち (cognitive salience)、すなわち、文のどの部分に焦点を当てるかは基本的に、(13)(14)の流れで捉えられる (Levin and Rappaport 2005 : 142. cf. 谷口2005 : 68)。

(13) 主語 > 目的語 > 間接目的語 > 前置詞の目的語

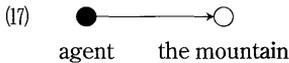
(14) 主格 > 対格 > 与格 > 斜格

したがって、(15 a) の直接目的語の “the mountain” が(15 b) の斜格目的語

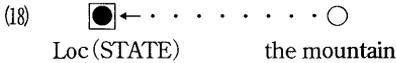
のそれよりも認知的際立ちが高く、動能交替の(16)の場合は、(16 a)の直接目的語の“the ball”が(16 b)の斜格目的語のそれよりも認知的際立ちが高くなる。Langacker(1999: 363)は、(13)(14)は行為連鎖に基づくエネルギー伝達の方向性を示す“natural path”と捉える。

- (15) a. They climbed the mountain.
 b. They climbed up the mountain.
 (16) a. Tom kicked the ball. (cf. Tom kicked the ball into the goal.)
 b. Tom kicked at the ball.

Climb の動詞は kick の動詞と比べると、主語 (agent) が対象となる「山」を登る行為を行うが、目的語 (the mountain) を変化させる行為ではない。しかし、足で歩くという物理的エネルギーを「山」に与えるため他動性は(12)の知覚動詞よりも高くなると仮定する。そこで climb のような移動動詞は(12)の構図のメンタルコンタクト (点線) をフィジカルコンタクト (実線) に変えたエネルギーが働くと仮定する。



認知的際立ち(13)の流れより最初に「主語」に焦点が当たるので、(15 a)で偉業の意味が出てくるのは「主語」(人)が「対象」、例えば「エベレスト」を征服することにより、「主語」に心的変化が生じることに起因すると仮定する。すなわち、「山登り」という行為は「山」の対象に対する位置的变化であるが、「エベレストを登頂した」という「偉業」や「達成感」という「主語」の心的変化がこの行為によって生じてくると仮定する。jump や swim の動詞も climb と同じように捉えられる可能性があり (e. g. ??John swam the pond. cf. John swam the lake)¹²、エネルギーの伝達は移動動詞の場合、対格目的語に対する(17)のエネルギーに加えて(18)のような逆方向の心的エネルギーが意味的拡張として働くと仮定する (cf. 中右1994: 338)。



他方、(15 b)の前置詞を伴う斜格目的語に対して、移動動詞は(17)のエネルギーだけが働き、「山頂」に登りきったかどうかは不明である。したがって、(18)の「山」から「主語」に対する心的エネルギーは働かないと仮定する。(13)(14)の認知プロセスと(17)(18)の行為連鎖の関係を踏まえると、「を」格は(15 a)の文の構造に対応し、「に」格は(15 b)の文の構造に基本的に対応するものとする。

4. 目的語認知とクオリア構造の関係

第2節では「に」「を」「から」の意味と移動動詞の関係を見た。そこでの説明は例えば、「?川にのぼる」は「川」が対象指定しにくいので不自然であり、「?空を昇る」は「空」が行為の対象にはなりにくいという記述であった。しかし、注の4で述べたように「鮭が川に上る」や「竜が空を昇る」の表現は可能なので、主語名詞や目的語名詞の正確な位置づけが必要である。また、「廊下を/?から歩く」「公園を/?から散歩する」における容認性の違いを捉えるのに、「を」が「移動行為の始まる地点がほかの場所ではない、ここだ」を示し、「から」は「一つの境界線を設定し、その境界線を越えて他方側へと移ることを理由に求めるが、「廊下」「公園」の目的語自体の意味には言及されていない。例えば、いつも公園で暮らすホームレスの人が公園の外に散歩する状況を考えて、「あのホームレスは毎朝、公園から街に散歩する」というのはそれほど不自然に感じられないのである。

注の9で述べたように、「1時間、山に登った」は「継続」と「結果状態」の曖昧な意味があるのに対し、「1時間、台に登った」「3分間、象の背中に登った」は移動中の「継続」の意味はなく、「登っている」状態の解釈しか出来ない。なぜだろう。このような違いに答えるには「に」と移動動詞の関係を見ているだけでは説明出来ない。本節においては Pustejovsky (1995) のク

オリア構造を主語名詞や目的語名詞解釈の手段として取り入れることにより、移動動詞と「に」「を」「から」の格助詞の関係を一層明確に出来ることを主張する。

影山(2008:267)はPustejovsky(1995)のクオリア構造について簡潔に説明している。クオリア(qualia)は生成語彙論(Generative Lexicon)のモデルの中で提案された概念である。単語の意味を多面的に捉えることが出来る。特に、名詞のクオリアの分析が盛んであるが、次の4つの観点から単語の意味が捉えられる。

- | | | |
|---------|----------------|----------|
| (19) a. | それは何か。 | (形式クオリア) |
| b. | それは何でできているか。 | (構成クオリア) |
| c. | それはどのようにできたのか。 | (主体クオリア) |
| d. | それは何のためにあるか。 | (目的クオリア) |

例えば、「玄関」のクオリアを考えると家の一部としての形式クオリアがあり、木やアルミなどでできている構成クオリアがあり、人工的に作られる主体クオリアがあり、人が出入りする目的クオリアがあると言える。4つのクオリアの中で1番、移動動詞との関連性を捉えるのは目的クオリアであると仮定する。なぜなら、ある対象に向かって移動するにはそれなりの目的があると考えられるからである。例えば、「?山に向かって登った」が不自然で、「山頂に向かって登った」が自然なのは、「山」の目的クオリアが「山頂」より明確ではないことが原因である。また、「山」は「借金の山」や「今日一日が山だ」のようにマイナスのイメージを表現する。それに対して、「山頂」は「山の頂上」を意味し、登山者は「登頂」という達成感を味わうために、あるいは単に山の頂上から景色を眺める目的で「山頂」を目指すのである。「山頂」には「山」のようなマイナスイメージがない。したがって、本稿では「山」は漠然とした、境界を持たない「場所」を表す対象として認知されるものと解釈しておこう。いずれにしても「山」は経路を表さないと考える。

次に、ある「対象」を「経路」として移動する場合は、その対象物を「主

体者が移動するのに相応しい場所」となるかどうかの見極めが必要である。例えば、「?人が川を上る」が不自然で「魚が川を上る」が自然なのは、「川」の目的クオリアは「子供」にとって「遊ぶ場所」(e.g. 「子供が川で泳ぐ」は可能)であり、「魚」にとって「住む場所」であるから「川」は「子供」にとって「経路」にはならないが、「魚」はそれを「経路」にすることができる¹³。

また、「人」にとって「水」は「生命」となるので「川を守ろう」という表現が生まれる。「鮭が(産卵するために)川に上る」のも「鮭」が「生命」を保つためである。この場合の「川」の目的役割は「人」や「生き物」に「生命」を与えるクオリアを持つことになる。

「廊下を歩く」が自然で、「?廊下から歩く」が不自然になるのは「廊下」の目的クオリアを考えると理解しやすい。「廊下」は部屋と部屋をつなぐ通路で、経路的な機能を持つ。したがって、「経路」を表す「を」格と折り合いがつく。「歩く」は様態動詞で「廊下」という場所を経路にして移動が可能となる。「廊下を走る」「廊下を通る」も同じ機能を持つ。ただし、「廊下で歩く」「廊下で走る」というが「?廊下を通る」というのは不自然である。「で」格は「廊下」を場所にするが、「通る」には「廊下」の経路解釈しかできない。「?廊下を散歩する」が不自然なのは「廊下」の目的役割を考えれば明らかで「廊下」は散歩する場所ではないからである。

「山に登る」に対する、「?山で登る」は不自然である。これは「登る」が「通る」「渡る」と同じタイプの有方向動詞に属することに起因する。一方、「歩く」「走る」は「山で歩く」「山で走る」が可能である。なぜなら、これらの動詞は有方向動詞でないからである。「通る」「渡る」「登る」のような有方向動詞は「を」格を取り、目的語名詞を「経路」にする。一方、「歩く」「走る」のような移動様態動詞は目的語名詞に対し「を」格を取り「経路」にする場合と、「で」格を取り、そこで行為を行う「場所」にする2つの可能性を持つ。さらに、「歩く」「走る」は「駅」や「公園」などの帰着点を示すことにより「に」格を取ることができる¹⁴。

英語で Tom climbed up the mountain と Tom climbed on the mountain と 2 つの前置詞句の表現が可能である。これらの文において、前者は for one hour (1 時間) の時間表現が付けられるが in one hour (1 時間で) の時間表現は up があると不自然に感じられる。後者も in one hour (1 時間で) の時間表現は付けられないが for one hour (1 時間) の時間表現は頂上に必ずしも達した意味は合意しないが付けられる。他方、Tom climbed the mountain には in one hour (1 時間で) の時間表現は付けられるが for one hour (1 時間) の時間表現は進行形にしないと不自然に感じられる。以下に、それぞれの英語の正しい日本語訳を付けてこの節のまとめにする¹⁵。

- (20) a. Tom climbed up the mountain for one hour/? in one hour.
(トムは1時間、山を／に登った。)
- b. *Tom climbed on the mountain in one hour.
(?トムは1時間で山に登っていた。)
- c. Tom climbed on the mountain for one hour.
(トムは1時間、山に登っていた。)
- d. Tom climbed the mountain in one hour/? for one hour.
(トムは1時間で(エベレストのような)山に登った。(偉業))
- Cf. *Tom climbed up on the mountain in one hour/for one hour.
- Cf. *Tom climbed down from the mountain in one hour/for one hour.
- Cf. Tom climbed down from the top of the mountain in one hour/? for one hour.

5. おわりに

本稿では、Tom climbed the mountain. と Tom climbed up the mountain. の文における目的語名詞 (the mountain) の解釈として「を」と「に」のどちらが良いのかについて検討してきた。前者は(20 d)のように「を」格で訳し、目的語名詞はエベレストのような誰にでも登頂できない「山」であることが分かった。また、後者は英語では目的語名詞は前置詞 (up) のあとにくるので全体解釈はできず、for one hour のような未完のアスペク (atelic) を取るが、日本語では「1時間、山を／に登った」と言えるので目的語名詞は「を」

でも「に」でも良いと言うことになる。本稿では、「1時間、山を／に登った」における「を」「に」に対する「山」は「経路」ではなくて「場所」とし解釈した。つまり、「山」には「山道」のような明確な解釈はできないと考えた。「私は1時間、山を／に登って行った」は可能であるが「私は1時間、山道を／*に登って行った」は「?山道に登る」が不自然になることが根拠となった¹⁶。しかしながら、「彼は1時間、山道に登って行った」は自然であるように思われる。この文を解析するには、「を」「に」の格助詞と移動動詞の意味的關係に加えて、主語名詞や目的語名詞の格助詞に対する認知的働きや¹⁷、クオリア構造をさらに検討する必要があることを物語っている。これらの問題は今後の課題としたい。

本稿では、第2節で移動動詞と目的語名詞の意味的關係を捉えるために、「を」「に」「から」の格助詞の意味を考察し(2.1節)、それらの格助詞と移動動詞の關係を見た(2.2節)。第3節では移動動詞と「を」と「に」の關係を行為連鎖の観点から見るとどのような構図になるのか、「偉業」を表す「を」はなぜ生じるのかについて考察した。結論として、「偉業」を表す「を」は(17)のような物理的エネルギーと(18)のような対象から主語に対する逆の心的エネルギーが働くことを提案した。さらに、第4節では移動動詞と「を」「に」「から」の格助詞の意味的關係を厳密に捉えるためには、移動動詞のあとに来る目的語名詞のクオリアを考慮に入れることが重要であることを主張した。

注

1. 「が」「を」「に」(間接目的語)は文法的な機能で決定される構造格で、「から」「で」などの意味的な機能で決定される内在格と区別される。
2. 本稿では?マークは意味的に少し不自然であることを示し、*マークはまったく文として容認できないことを示すのに使用する。
3. 「行く」「来る」の移動動詞は、その対象が「場所」の場合は「～に行く」「～に来る」と直接に言えるが、「人」や「物」の場合は「～のところに行く・来る」のように「の」ところ」を補う意味的制限がある(三宅2007:18)。
 - (1) a. 私の研究室に来なさい(*私の研究室のところに来なさい)
 - b. *私に来なさい(私のところに来なさい)

c. *机に来なさい (机のところに来なさい)

しかし、「投げる」「蹴る」の動詞はこの制限が働かないように思われる。

- (2) a. トムがボールを私の研究室に投げた (? トムがボールを私の研究室のところに投げた)
- b. トムがボールをメアリーに投げた (トムがボールをメアリーのところに投げた)
- c. トムがボールを机に投げた (トムがボールを机のところに投げた)
4. 「鮭が川に上る」や「竜が空を昇る」の表現は可能なので「人」が川に上ることや、空を昇るとするのが不自然な行為であると解釈するのがここでは正しいであろう。
5. 田中・松本 (1997: 9-11) は across the road (道路を横切って) や through the tunnel (トンネルを通り抜けて) は経路を表すが、along the river (川に沿って) は「沿う」という動詞が「横切る」「通り抜ける」とは異なり「移動経路」を表す動詞ではないとして「道を沿う」は不自然になると説明する。要するに、「沿う」は「に」格を取るということを言っている。なお、(4 b) は森田 (2006: 253) からの引用例。
6. 「玄関先に出た」は可能。「玄関」は家の一部と考えるのが一般的である。「出る」には起点 (~から) の意味と、着点 (~に) の両面があり、「玄関先に出た」は後者の意味で、「玄関先に出てきた」を含意する。なお、「出かける」(e. g. デイズニーランドに出かけた) は「に」をとり、「を」ととらない (e. g. *デイズニーランドを出かけた)。「出かける」が着点指向の動詞の意味を持つからである。
7. 英語と日本語では着点の表し方が異なる。「トムは駅に走って行った」は“Tom ran to the station”と to の前置詞で示すことができる。「トムは駅に走った」はプロセスを表し、着点を示していないので英語では“Tom ran toward the station”と言わなければならないが多くの英語の学習者は“Tom ran to the station”を「トムは駅に走った」と訳し、駅にトムは着いているかどうかを尋ねると、間違っただけでトムは駅に着いていないと答える傾向がある。
8. 「登る」は上方への有方向動詞であるが、climb は“climb down from the roof”「屋根から降りる」と下方への移動も可能となる点に気を付けたい。
9. ただし、「1時間、台に登った」「3分間、象の背中に登った」は移動の「継続」の意味はなく、「登っている」状態の解釈しか出来ない。その理由を考えるには、「に」と「登る」の対象となる名詞の目的役割 (クオリア) を考慮する必要があるであろう。
10. Tom climbed the mountain は、トムが山に登ることによって山に影響を与えるわけではない。しかし、Tom climbed up the mountain とは異なる偉業や功績 (feat) の意味が出てくると言われている (Schlesinger 1995: 65)。前者の文では例えば、「エベレスト」のような山に登りきったことが含意される。*Jack climbed the bed が不自然に感じられるのは「ベッド」に登ることは功績や偉業に値しないからである。Schlesinger は他の例として“I have already jumped this gutter”のような文は“over”がないと非常に不自然な文であるとするが、「近所にあるすべての排水溝を跳び越える賭けに出た人」がそれを達成したこと (completion) を強調したい場合には「偉業」を達成したことになり、“over”がなくても使える可能性があることを示唆する。
11. 谷口 (2005: 81) によると、知覚動詞には対象に影響を与える物理的エネルギーはな

- いものの注意や意識を向ける心的作用があり、したがってメンタルコンタクトが対象に働くので知覚動詞が目的語を取りうると仮定する。しかし、この考え方は see や hear の対象となる目的語の解釈が日本語では「を」格ではなく「が」格になる点を踏まえていないので問題である (e. g. John saw the rainbow. 「ジョンは虹が見えた」, John heard a strange sound. 「ジョンには妙な音が聞こえた」)。
12. Schlesinger (1995 : 65) の例。Dixon (2005 : 300) は “He swam across the mill-stream” 「水路を泳いで渡った」の文における「水路」は誰でも泳いで渡ることができ、“She swam the English Channel” のように「偉業」をなすわけではないので “across” が省略されないと説明する。
13. 「釣り人が (アマゴを取りに) 川を上る」は「川」を経路にして移動ができる。
14. 三宅 (1996 : 145) は、『「着点」をも同時に含意する場合は、「起点」を対格で標示することはできない。』という一般化をする。例えば、「太郎が部屋*を／から庭に出た。」の文における制限である。三宅はさらに『意識的にコントロールされない移動の場合は、「起点」は対格で標示できない。』という一般化もしている。例えば、「けむりが煙突*を／から出た。」の文における制限である。
- 前者の制限は「に」の「着点」が「から」を明確にし、「から」は2つの領域の移動という「を」の「起点」と異なる意味制約があるので、「部屋」を地点として庭に出ることが可能である。しかし、「? 部屋の中から庭に出た」は不自然な感じがする。「部屋の中から外に出た」は自然なので内と外の空間的な地点の関係を前者の制限を踏まえる際にさらに考慮する必要があるであろう。
15. これらの文の容認性のチェックを Jan Gordon, Francisco Martinez, Eileen Warner の三人の先生にお願いした。
16. 「台」や「象の背中」は目的クオリアとして「経路」にならない対象である。したがって、「1時間、台に登った」「1時間、象の背中に登った」は「継続」の解釈がなされず、「登っている状態」の解釈しか出てこないと考えられる。
17. 例えば、Langacker の認知的プロセスを援用した森山 (2001) や森山 (2003) における「源泉領域」と「目標領域」の概念は「を」と「に」の違いをスキーマ的に捉えている。

参考文献

- Anderson, Stephan. 1971. On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation. *Foundations of Language* 7 : 387 – 396.
- Dixon, R. M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.
- 影山太郎 (編). 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 影山太郎 (編). 2008. 『レキシコンフォーラム』No. 4. ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. 1990. “Settings, Participants, and Grammatical Relations.” *Meanings*

- and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsohatzidis, 213–238. London: Routledge.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Levin, B. and M. Rappaport. 2005. *Argument Realization*. Cambridge University Press.
- 三宅知宏. 1996. 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110: 143–168.
- 三宅知宏. 2007. 『日本語と他言語』（比較文化研究ブックレットNo. 5）鶴見大学比較文化研究所. 神奈川新聞社.
- 森田良行（編）. 2006. 『日本語の類義表現辞典』東京堂出版.
- 森山新. 2001. 「認知的観点から見たヲ格とニ格の意味・用法の違い」『日本語教育研究』第4号、高麗大学校教育大学院同門日語教育研究会、19–28.
- 森山新. 2003. 「認知的観点から見た格助詞ニの意味構造」『Foreign Language Education』10–1、韓国外国語教育学会、229–243.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Schlesinger, I. M. 1995. On the Semantics of the Object. In Bas Aarts and Charles Meyer (eds) *The Verb in Contemporary English*, 54–74. Cambridge: Cambridge University Press.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』研究社出版.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.